

群杯乾

● 第九輯

● 一九二七●四月版
● 乾杯群社發行

NAKANOKOBAYASHI

勇雄 直人
參篇 壹篇



ノートされた構圖

中野 勇 雄

●蜘蛛の巢喰つた 蒼白い 女の頭骸骨。

●灯が明滅して 華やかなCAFE銀座。 光りの交錯したヴェールが下りる。

●籠に盛られた林檍の色。
朝の輝き 空。

●白と赤 セルロイド製の二つの輪が時計の振子のやうに廻轉してゐる。

●テーブルの見えざる下部にひつついた一匹の蛭。 二つに裂け 男の唇に變る。
(透明な管を真赤な血がGGRRRと駆けめぐる！)

●眼 松葉のやうなまつ毛。

●急進してゐる列車の窓。 窓外の水平線。
松林がその窓を斷面する

●窓際に座す女 三人の男に圍まれた女の席。 女のノスタルジアな。ポーズ。

●白紙へ黒點の凝集。 猛雨のやうな凝集。
暗黒。

暗黒が真中から二つに裂ける！
目茶苦茶に裂斷する。

●急速に飛散する 女の足 手 眼 唇

●汎濫。

●眼球の解体
瘦せ細つた狂乱の男の幻覺——もたげた首首首！

●列車の荷上綱にのび上つたカマキリ。
もたげた首 男の首になる

●カマキリの嘲笑 ぐるぐる巻く眼と眼。

●暗黒。

蠟燭のやうにくびれた女の首。
カマキリは落ち 首に吸ひ付く。

●列車の窓際 女が眠つてゐる。
列車が次第に猛烈な速度を加へ あらゆる形象がガチャガチャになつてゆく——。(1926, NOV)

風

抵觸 抵觸

悲鳴だ

松の木と荒縄とで

意志の欲充だ

潑刺として空に鳴る

風は

男の腕

鈍重な狂心と抵觸する

冬の意志だ……

海の喇叭

蠅はだんだん沖へ飛んで行つた

——白い壺のやうなものを感じた

遙か彼方で喇叭が鳴つた

沖 水平線にも波が立つてゐる！

蠅は黄色い眼をふいた

小林 直人

●突風だッ！

鬱蒼たる大森林を打ち揺がす突風だ！

反抗の呪ひに足なえた屍と

煤煙に染め抜かれた下黒い肺臓と

あゝ長い長い間難居した俺達！

幾度か断崖から突き落され

●俺達の仲間はいのしし

鈍重なあくなき力の猪

鋼鐵をも噛み裂いて走る猪

突風だッ！

幾度か塵埃の中に踏み蹴られ
あゝ長い長い鐵鞭の元の生活！

突風だ！

突風だ！

毗は反抗に冴え

太腕は憤怒に燃え

今こそ鐵鎖の岩壁をよじ登る

壯烈なる猪群 俺達兄弟！

よくあらうと悪くあらうと

おゝ悲痛なる踏臺 俺達仲間の骨！

突風だ！

突風だ！

黒色の突風吹きまぐるところ

是であれ非であれ

俺達兄弟は叫喚し躍進し

人類の意志へまで突撃する

さあ今こそ！

物凄き突風を煽り立て

砂塵を蹴つて猛進する猪だ！

● 短篇小説

小林直人

私は青白い妖婦に可愛がられて

「去勢派」になつた

「それは本當よ、嘘よ」面白い！

反動時代……………

そして東京へきてから

混沌の「土」に目まひした

突撃の銅鑼が空に鳴る

君達の胸に

DYNAMITEの動章をぶら下げる

—— 立志自叙傳 ——

● 乾杯群心覺え

發行 ● 原稿輕り次第二人が生きてる間

目的 ● 情緒舌饒建築

頒布 ● 好きな人間へだけ

—— 切手を寄與してくれた志賀菊地外三人の人々に感謝します ——

近 信

中野勇雄

● 自分が自分へ挑戦争闘！結局さうぢやないか。コンミ

ナの論を讀んでゐて自分は自分にそんな警告を與へた。

● 最近自分はまたこんな風な考を持つ様になつた。——

結局自分は何でもあり得ない！

だが何でもあり得ないものである。

● 自分と小林とが乾杯群を出してから一年以上歩いてきた。

願ひて二人でふふんと笑ふ。これからの計畫は満載さ

れてゐる

● 自分は四月に詩集を出すことにした

題「樹は空に生へてゐる」

二三十頁の薄つぺらなもの定価十錢。直接社宛に申し込

んで頂きたい。

● 三野混沌氏の詩集「百姓」出た 定価二十錢。取次ぐ。

昭和二年四月十日發行

編輯者

發行者

印刷所

東京市深川區扇橋町一の十七

福嶋縣平町二丁目三十

東京府南足立郡千住町二丁目四十九番地

乾杯群社

中 野 勇 雄

永野商店印刷部

三野 混沌 著

●
おれはなんにも言へない
まぐ／＼雨蛙が
四つの吸水盤をつつばつて
冷こい薄い膜の腹を
口によせた

ほんと雨蛙はおりた
地に歪んでゐる
おそれをしらない
そしておれの唇は
ますますがさがさだよ

詩 集
百 姓

福島縣石城郡好間村大字北好間
三野 方 土

社

20SEN

10SEN 開 墾 者 三野混沌詩集